

佑啓

ゆ う け い

発 行 者
社会福祉法人 佑啓会
理事長 里見 吉英
〒290-0265
千葉県市原市今富 1110-1
TEL 0436-36-7611
FAX 0436-36-7612
編集者 広報委員会

縁・園・宴・塩・永遠

熊澤 徹

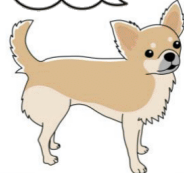
令和二年、観測史上最も暖冬だったようだ。満開の桜の中、キラキラした新任職員をみながら、新年度をスタートする。令和最初の春は、そんな当たり前のことを当たり前にできる春ではなかった。桜がいつ開花するかという話題は忘れ去られ、この年は法人にとって、そして世界中の人にとって忘れられない年になるに違いない。

前号の佑啓でも取り上げられたが、新型コロナウイルスは更に猛威を振るい、緊急事態宣言が発出され、福祉は元より社会が経験したことがないことが毎日のように起こり、更新されている。これを未曾有と言うのだろうか。この先一体どうなってしまうのだろうか、全く想像もつかないそんな時期である。とにかく利用者と職員から感染者を出さないようにと、やれることはしっかりやり、後は祈るのみである。そんな四月の中旬。全てが制限だらけの毎日の中でストレスを抱え、佑啓一面。この内容はおそらく皆さんの記憶に残らないだろう。ならば思う存分書いてみよう。

私は千葉県館山市の田舎で生まれ育ち、これが人格形成において大きく影響していると感じるので、皆さんにも少し知って

頂きたい。人口三〇〇〇人程の漁村で、家の目の前三〇メートルには太平洋が広がり、波の音を聞きながら育った。日本画家・青木繁がここ館山で画いた代表作「海の幸」よろしく、海女さんがおっぱい丸出しで海にいるのが日常であり、家の土間をカニやフナムシが歩いているのも日常であった。明るく器用な父、明るくて働き者の母、そして兄と妹の五人家族。兄妹は歳が近かったからケンカもしたが、笑いが絶えない家族だった。あと知人からチワワを貰って飼っていたが、あの頃チワワは日本中で我が家にはいなかったのではなかと思う。

小さい「チィ」
だなんて
安直だワン



愛犬「チィ」

第二次ベビーブーム世代であったが、幼稚園年少から小学校六年生までは一クラスで全校生徒一〇〇名程の小学校だった。なので全校生徒の名前はもとより、その家族構成、家の場所、そして田舎特有の屋号まで周知されていた。私のクラスは、男子二

〇名と女子一〇名のマンモスクラスで、その中で勉強はクラスで四番、駆け足は五番、これは六年間ほぼ変わらなかったと思う。そういえば近所に「自転車速いオジサン」がいて、何か声をかけると追いかけつけてくるので逃げる、という遊びが流行った。取っ捕まっても別に怒られる訳でもないからまた逃げるの繰り返し。今思えばオジサンには知的障害があつたのだと思うが、オジサンが駆使する六段ギアの自転車の速さは僕らの憧れと畏怖であつて、それ以上の感情はなかったように思う。子供ながらに申し訳ないことをしていたが、オジサンも楽しそうにしていたとも思ふ。これが私の福祉との出会いだったと記憶する。ある冬の朝、チワワが冷たくなっていた。今思えば座敷犬なのに外で飼っていたからだろう。兄妹で手を合せて泣いたのを覚えている。

中学生。とうとう二クラスになった。「クラス替え」なんていう響きだろうか。人生が二倍になった気がしたものだ。一年の理科の授業でカエルの解剖があり、大きいカエルを捕まえてきたらカエル加算をあげようと先生に言われて放課後捕まえに行つた。私が一番大きいのを捕まえ、意気揚々とその話を家族にすると、父から「バカ者！お前のくだらない意地のせいでカエルが死ぬ。明日朝逃がしてやれ」と言われた。翌朝一番で逃がし、授業の前に先生に報告すると意外にも怒られなかった。先生も何が大したものかわかってくれていたからだろう。今でも思い出せない思い出である。いつか「私はあの時のカエルです」と出て来てくれると嬉しいのだが。大学生。上京してすぐに付き合いでデイスコ(クラブ)でも俱楽部でもない)に連れていかれた。時はバブル絶頂期！頭上で

女性が下着丸見えで踊り狂っていた。東京はすごいところだった。負けてなるものかと。だが都会の人はなんと表現すればいいのか、エネルギーシチュエーション？パタリテイのある人？が少なくないとも感じていた。気が付けばたくましく成長していた熊澤少年であった。



目の前に海が広がる地元館山！！
海女さんを思い出します...

就職活動時、親は地元に戻ってきてほしいと市役所を受験させたが撃沈。私も将来的には地元に戻りたいとおぼろげに感じていたので、県南にも営業所があつて将来戻ることが出来るような会社を探して就職し、東京で五年間営業の仕事をした。仕事は順調で終身雇用されるものだと疑ってはいなかったが、都合良く地元に戻れないことも薄々感じていた。その後母が病気になるというこもあり退職を決意した。兄妹は東京で働いていたので両親は喜んでくれ、それがまた嬉しかった。ちょうどその頃、ふる里学舎和田浦がオープンのための採用をしており、当時は新卒採用が主であつたが、親があの手この手を使ってくれたのだろう、なんとか拾って頂けた。佑啓会には、高い志と士気、そして家族的な雰囲気があり、職場を選べる立場にない私にとってはまさに幸運だった。ここで死に物狂いで働くかと思ひ、その年に結婚を決意した。その

後母は亡くなったが、初孫を抱かせてあげられたことは唯一の親孝行だった。こんなに悲しい事があるのかと思つて泣いた。そして愛情を受けて育ったのだと改めて思つた。
平成十四年、佑啓会二番目の事業所が誕生し、市原と和田浦には、独特の緊張感や距離感があり、市原に負けるな、追い付き、追い越せと新人ながらに感じていた。当時は法人がこんなに大きくなくなるとは思っていなかったが、仕事には一〇〇%、その後の宴会には二〇〇%の気持ちで臨んできたのは今も変わらない。二〇〇%の気持ちで臨むと、とても紙面には書けないのが残念だが。
和田浦に新しい目玉商品をと考えたのが製塩作業だ。原料は海水と薪だから材料費はタダなので、里見理事長も「これは良い」と太鼓判。その後、開発と生産の戦いが始まった。仕事が終わった後、軽トラにタンクを積んで海水を汲みに磯に行き、気管支炎になりながら煙の中で延々と海水を煮続けると驚くほど少量の塩が完成する。生産が間に合わないからとこっそり厨房で作つて、こつぴどく怒られたこともあつた。これこそ本当の汗と涙の結晶と言うのだろうか。
現在。どこの事業所にも通えるようにと市原市の五井に居を構えた。「人間万事、塞翁が馬」。あの就職活動時の思いは、その後の状況によってこうも変わってくるのだと思うと感慨深い。

年々規模も大きくなり仕事の幅は拡がり、大変な仕事である。しかし全く心配はしていない。里見理事長からも「思いっきり仕事をしなさい。責任は取るし、みんなが支えてくれるから」と常々言葉を頂く。トライさせても来える環境が佑啓会にはある。これ程恵まれた環境のサラリーマンはそうはいないだろう。今まで一緒に歩んでくれた方、導いてくれた方に感謝を伝えたい。
四月一日に施設長を拝命した。今度は私がみんなに返す番だ。同僚はみんな戦友だと思つてい。みんなが安心して仕事ができるように何でも受け止めてあげられるように、そして一緒に乗り越えて行けるようになりたい。
最寄りのバス停を降りて階段を上ると、眼下に市川の街が開け、遠くには富士山も見える。この景色が好きで、毎日ここで立ち止まり、ふと思う。松香園の風。この風に包まれてはや一ヶ月。ここには軽やかで心地の良い風が吹いている。永きに渡って松香園を見守ってくれていたに違いない。きつと追い風となつて、コロナウィルスなんて吹き飛ばし、前に押し進めてくれるだろうと。
(ふる里学舎松香園 施設長)



階段を上った場所から見える景色。
毎日風を感じています。

